

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

——愚行の社会学（二）

澤 野 雅 樹・内 藤 潔

一 アメリカにアメリカンなどという名前のコーヒーはない！

うだるような夏の午後、頬を伝う汗を拭うと、辺りを見回した。喉が渴いていたので、コーヒーでも飲んで少しばかり休もうと思ったのである。だが、生憎、視野には喫茶店もコーヒー・チェーンも入ってこなかった。仕方なく、目の前にある大手のハンバーガー・ショップに入ってみることにした。

さすがに「笑顔はタダ」の店である。うら若き女性店員がにこやかに迎えてくれた。同じ笑顔を崩すことなく、ひたすら注文を待ち続ける女性に対し、些か気後れしながらも飲み物を注文することにした。

「コーヒーだけでもいいですよね」

「ハイ、結構ですよお」

当然といえば当然の対応なのだが、彼女の無駄に明るい返答に、なぜか私は胸を撫で下ろしていた。ああ、こ

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

のうら若き賢明な婦女子は、来店の意図をしつかりと理解してくれたのだ。

……と思ったのは一瞬に過ぎなかった。あろうことか彼女は間もなくセット・メニューの説明を早口で開始したのである。目の前に掲げられたメニューは、幾通りもの複雑な組み合わせのセットを色鮮やかに提示している。しかし、ファースト・フード初心者にとっては冗長なカタカナの名称と相俟って目眩を起こさせるような代物であり、ただ眺めているだけでも、かなりの動体視力を要する奇怪な図表であった。

「……コーヒーだけで結構です」

やつと意思が通じたようだ。コーヒーを受け取り、代金が示された。提示された金額の通り、きっかり小銭を渡して去ろうとすると、彼女は再度、面妖な言葉を口にした。

「サービスカードはお持ちですか」

彼女は手元を見つめ、客の私とは目を合わせようとせず、まるで謡うようにして声を出した。まさに「声を出した」のである。「話した」、あるいは「語った」という言葉は似つかわしくない。一定の手順にしたがい、次の行動を促すための信号音を発したのである。そういえば最初の笑顔にしても、客である私と視線を合わせたものではなく、口角を上げたまま硬直させた顔を、一定方向に向けていたに過ぎなかった。

彼女は、いわば売買システムの設計図に記載された規定通りの役割を果たすべく、指図された通りに身体を運用し、表情情報と音声情報を発信していたのである。もはや人間関係は存在しない。経済行為という観点から極端に単純化された行為の連鎖があるのみなのだ。仮想的な関係に基づくやり取りが実際に履行されているだけだから、必然的に行為はギクシャクしたものになる。

この種のシステムは、誰がカウンターに立とうが間違はなく同一の行動が採られるように、一般に「F・Pシステム」の名で呼ばれるフル・プルフ（バカ除け・バカ避け）の仕組みが採り入れられている。ところが硬直したフル・プルフは別のF・P、すなわちフル・プロダクション・システムとして働くことがある。

カウンターで気苦勞な商交換を漸く済ませ、カウンターを離れようとする私の背に、マニュアル通りの手順を一部失念していたのか、思い出したように彼女は頓狂な鳴き声を發した。

「ボテトはいかがですか」

それは巧まずして、二つのF・Pが同時に機能した瞬間であつた。

私たちはフル・プルフを、「もしも間違つて人事がバカで能無しの間人採用してしまつたら」という仮定の下に作成されたマニュアルと思つたりしていいのだろうか。もしもそうであるならば、そのマニュアルには「緊急」とか「臨時」、あるいは「有事」といった余分な言葉が付けられていなければならぬ。

マニュアル化社会と言われてすでに久しいが、もしも接客マニュアルの徹底がフル・プルフだとすれば、接客業に携わる者すべてが必然的にバカと見做されているのであり、他方、採用される者たちもまた、マニュアルを身体に覚えさせることを通じて、始めから終わりまで恒常的にバカである者として扱われ、訓練されていることになる。臨機応変とか当意即妙といった人間関係における熟達を感じさせる言葉や、「老練」やら「融通無碍」といった人生の神髓のような味わいを窺わせる言葉など、始めから求められていないし、それどころか右に挙げた熟語の類を持ち出したりすれば、「そういう幻のようなものをこんな職場に求めなさんな」と軽くないなされてしまいかねない。

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

近代社会は、複雑なシステムを組み上げた。企業も行政も肥大し、巨大化の一途を遂げるばかりだ。単に巨大化するだけでなく、例えば支社を世界中に作り、店舗を各地に開く。そして、それらを一元的に管理しようとするとき、人間はどのように扱われることになるだろうか。思い切つて、こう言つてしまおう。近代化が進めば進むほど、人間はバカと見做されるようになるばかりか、実際にバカ扱いされるようになる、と。

人をバカと見做し、バカ扱いすることをも愚行の中に数えておくべきだろう。「人をバカつて言う奴がバカなんだよ」と洩垂れ小僧でさえ言うではないか。ただし、或る人物が別の人物をたまたまバカ呼ばわりすることについて我々は関心を持たない。言い換えるなら、我々が関心を寄せているものは組織化され、集团的に履行される愚行であつて、人をバカと見做し、バカとして扱うことについても、それがシステムティックに構築されて初めて我々の関心の範囲に入ってくるということを断つておくべきかもしれない。

まず私たちの「生」が国家からいかなる愚弄を受けているか、行政システムとして最も洗練された税制面からとくと眺めてみるとうかがうか。

我が国の税制は、ほぼ毎年改訂されると言つて差し支えない。ある日、税務署と法人会によつて半強制的な税務説明会が共催されたので、いそいそと話を聞きに行った。源泉所得税や法人税などが改正されたこと、および決算の正しい方法について、担当者からいつもの退屈な名調子で、さも大切そうな解説がなされた。毎度のことながら、「皆さんのためですから」と訴える語氣に孕まれる「もし誤りがあれば、そのときは延滞税があるぞ」という暗然たる脅しのもとに、間違ひのない申告・納税に向けた税制改正のポイントについてひとしきりの説明が

あった。特に課税の対象になるのか否かの判断が専ら納税者に任せられ、したがって間違いも多く、しかも税務署ではその誤りを捕捉し難い、つまり納税の統制が困難な「印紙税」に関しては、念入りとも言えるし執拗とも取れる説明があった。

二〇〇九年度（平成二十一年度）の改訂のうち、取り分け関心を惹かれたのは減価償却資産の法定耐用年数の見直しであった。周知のように減価償却とは、収益獲得のために購入した資産の取得価格を、利用した期間に応じてコストとして按分計算し、その額を年度ごとに所得から差し引くことができる企業会計上の方法である。その資産には建物や機械設備などの有形固定資産、または特許権や商標権、漁業権、あるいはソフトウエアの諸権利などの無形固定資産がある。こうした資産が機械の老朽化であれ、性能の陳腐化であれ、いずれにせよ収益獲得の過程で価値が漸進的にすり減ってゆく、というのが減価償却の考え方である。ところが、これら資産の物理的かつ機能的な寿命を客観的に把握するのは、なかなか容易なことではない。そのため統計科学的な手法により見積られたという法定の耐用年数を用いることになる。

さて、問題はそのお上が下された法定耐用年数なる代物である。個々の物品の耐用年数については、配布された解説書の「別表」に記載されているのだが、その解説書には「別表第四にキウイフルーツ樹及びブルーベリー樹が追加されたほか、法定耐用年数の見直しが行われました」とわざわざ記されていた。怪訝に思い、「別表第四」の該当ページを繰ってみると、「生物の耐用年数」という文言が目に入った。たしかに農畜産業における収益獲得のために購入された生き物はみな資産なのだと言われれば、その通りではあるだろう。

さらに詳細に別表を読んでみると、こんな記述があった。

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

「豚…三年」

「牛…繁殖用（家畜改良増殖法に基づく種付証明書、受精証明書、体内受精卵移植証明書又は体外受精卵移植証明書のあるものに限る）六年、種付用（家畜改良増殖法に基づく種畜証明書の交付を受けた種おす牛に限る）四年」

そうか、豚は肉の柔らかいうちに食べられてしまうから三年なのか。種付で疲れ果てるオス牛は、他の牛よりも耐用年数が二年も短いのか。なるほど。納得するとともに、さらに馬の覧を読み進めてみた。競走馬が四年で、繁殖用と種付用とが同じく六年となっていた。やはり人間どもの射幸心に応えなければならないという心理的ないし生理的な圧力は相応に大きくなるのかもしれない。彼らは、肉食獣から逃げるわけでもないのに、他の馬よりも速く走るという倒錯的な激務に従事せねばならないのだから、必然的に耐用年数も短くなるのであろう。成績が悪ければ馬肉にされるとは知らないだろうから、きっとこんな風に考えながら——「オレは何が悲しくて、他の馬を出し抜くなどという生物学的に何の意味もない行為に全力を傾けなければならないのだ……？」

植物の方を見てみると、温州みかんが二八年、柿が最長の三六年、アスパラが一年、キウイフルーツが新参者ながら健闘して二三年、意外とだらしがないのがパイナップルで三年の短命である。徴税のためとはいえ、こうして科学的に生物の耐用年数が決められているというのは、相応に驚きであつたし、何となく納得させられてしまう。

減価償却の対象として、牛や馬や温州みかんが耐用年数表に組み入れられているのだが、さすがに種付証明も要らず、また減価償却とは表現されないものの、人間とて税法上のこの種の規定から無縁ではありえようはずも

ない。社会保険や所得税の対象としても、それら制度の論理設計においては計算項として人間の耐用年数もまた設定されている。例えば、高齢者とは六五歳以上と規定され、高齢者施策の対象たる「量」にカウントされる。所得税法や年金制度におけるサラリーマンの法定耐用年数は、就職から定年退職までの期間となり、六〇歳を迎えると税法上の耐用年数が訪れ、生産に寄与する計算項として（つまり法定資産として）は認められなくなる。税法上は、動物だろうが植物だろうが、はたまた人間だろうが求められているのは明白な数値としての単純さであり、純粋さなのである。

このように生物でさえも、統計科学の名のもとに「合理的」にその「生」が測定され、生産に寄与するか否かによって、耐用年数が一律に設定されている。官吏たちの思い上がった「正しい」税金徴収のための計算項として、実体的な厚みをもった「生」の個体差は削ぎ落とされ、凹凸や勾配は均され、限りなく透明で「標準的な数値へと変換されるのである。

解説書の最終ページには次のように書かれていた。

「法人会はよき経営者をめざすものの団体として会員の積極的な自己啓発を支援し納税意識の向上と企業経営および社会の健全な発展に貢献します。」（「法人会の基本的指針」財団法人全国法人会総連合）

この意味不明な美辞麗句の連なりを、文才に恵まれた私たちが、誰にも明確に理解できる文章へと書き直してあげるとしよう。

「法人会は、お上^がが望むような従順な生産の担い手の集まりとして、会員の自発的な服従と規律訓練を支援し、反生産の仕組みに疑問を抱くところか、そのおこぼれにしがみつこうとする無意識的な反応性（反動性）の向上

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

を旨し、資本の回転にへばりついて離れることなく、市場社会がますます生を包圍し、覆い尽くし、そして骨までしゃぶるプロセスに貢献いたします。」

私たちの社会には、意味はよくわからないけれど、何となく善良そうに響く美辞麗句を並べておきさえすれば、どんなことでも受け入れられるかのような嘆かわしい精神風土が築かれつつある。高等教育に携わる研究機関でさえも、さしたる疑問を抱くことなく、醜惡な管理装置に自ら首を差し出し、すすんで隷属しようとする始末なのだ。だから、この法人会の言葉にみられる美しいようでいて、実は目を覆いたくなるような卑屈な姿勢でさえも、我々にはまだ人間的であるように見えるのだ。なぜなら税制が捕捉した我々の生は、すでに人間ですらなく、動物や物体と同じ数値に還元され、我々を等し並みにバカとして取り扱う愚鈍の行き着く先を見せられたからである。我々は、あらためて愚鈍 (beuse) という語彙のうちに「けだもの (bête)」が息を潜めていることを思い出すべきだろうか。生は、留保なき肯定の対象であることをやめた途端、雪崩れるように暴落し、あつと言う間にけだもの以下の数値になり下がるのだ。

二 もちろんフランスパンなどというフランス語も存在しない。

近代とは何か。この問いには終わりがなく、それゆえ決着することもない。したがって、もはや問う意味もないかという、そういうことではない。近代への問いは、必然的に近代化というプロセスをそれぞれの時代において問い直す試みにつながっており、それぞれの時代が抱える問題を洗い直す取り組みになっているのである。

そして、近代化とは、完了や終焉の時刻が定められたものではなく、社会や文化に変化が生ずる限り、終わることのできないプロセスでもある。

ならば、そのような近代化の開始時刻を「ここ」と定めることは、果たして可能だろうか。大多数の社会学者は一九世紀と言うだろう。政治学者なら一八世紀後半にターニングポイントを置きたくなる人も少なくないだろう。社会保障を学ぶ人たちは、その理念がやっと現実のものになったとき、すなわち第二次大戦以降を近代と呼びたくなるかもしれない。情報科学を専攻する人々はノイマン型コンピュータの出現を近代化の出発点に据えたくなるだろう。しかし、生物の進化を歴史的に探究する人々なら、真核細胞の出現を近代化の原点に据えたい気持ちを抑えつつも、多細胞生物が爆発的に多様化してゆくカンブリア紀（五億四〇〇〇万年前）か、さもなくば巨大昆虫が出現した石炭紀（三億二〇〇〇万年前）を近代化の原点に定めたくなるだろう。そして、もしも同じ観点から近代化の終わりを問うなら、哺乳類のY染色体の耐用年限が尽き、もはやオスが一体も誕生しなくなるときになろうか。五〇万年後か、あるいは六〇万年後になるかもしれないが、ヒトの社会がその頃まで続くか分からないし、ヒトがヒトの姿のまま生を営んでいられるか否かもわからない。

近代であれ、近代化であれ、それは物差し の尺度であり、いかなる現象に当てはめられるべきスケールであるかによって、何もかもが異なってくる。ただ、我々が生物学的な知見を持ち出し、進化の時間にとつての近代を問うたのは、単に専門外の知識をひけらかしたからではない。人間存在を貫く生物学的な本性を、進化の時間において問い尋ね、捉えようとするようになったのは、まさに人文諸科学が言うところの「近代」であり、生物学という学問が離陸する時代の話なのである。

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

生物学を始め、近代諸科学が整備された時代は、同時に人間の思考から神の創造が神話として斥けられるようになった時代でもある。人間は神に似せて作られたのではなく、ドブ川のぬめりのような単純な細胞から始まり、気が遠くなるほど長い時間を掛けて進化してきたと、そう考えるようになったのは、ごく最近の話なのである。イブはアダムの肋骨から作られたのではなく、逆に女の発生が男の発生に先立ち、男は殆ど付け足しのように現われて、先に滅びるよう定められているのであり、そう考えられるようになったのは、もつと最近のことである。

ニーチェの言う「神の死」という出来事は、それゆえ血塗れの惨劇ではなく、人間の認識から神が退場してゆくプロセスであり、我々の思考の中心から神が姿を消し、玉座を彩っていたオーラが瞬く間に神々しさを失ってゆくプロセスなのである。マックス・ウーバーは同じプロセスを「脱呪術化」と呼び、認識の主体が神話のぬるま湯から身を引き剥がして、世界を冷徹かつ合理的に再編成してゆくと考えた。

正直、脱呪術化が不可逆的な過程なのか否かは分からない。というのも、単純に信仰が廃れたというわけでもなく、ただ認識と信仰の棲み分けが行なわれるようになったと言う方が適切だからである。少なくともキリスト教世界に起きたのはそのようなことであつた。認識と信仰の分離が進行してゆくのは、政教分離の原則が貫かれてゆくのと同じ理屈である。だから単純に神々が行方不明になり、怒りの雷が落ちないという理由で罰当たりな人間どもが急増したというわけではない。しかし、認識の世界における「超越」は価値の下落を免れず、臃げな姿をますます希薄にしつつあるというのが正直な趨勢ではある。

ミシエル・フーコーは『言葉と物』において、ニーチェの哲学における真の問題は、神の死などではなく、そ

れは一つのきっかけに過ぎないと述べていた。空位の玉座に座して浮かれる存在としての人間、この自惚れの激しい生き物がその役割を終えるときの到来、それこそが真の問題なのである。我々はフーコーの言う「人間の終焉」という予言を論証するつもりはないし、彼の論理を整理するつもりもない。ただ、空位に座して浮かれ騒ぐ「人間」の短絡的な愚かさには今なお多大な関心を寄せている。

マックス・ウェーバーの言う合理化は、冷徹な官僚装置が軋みながら作動する様子を我々に思い浮かべた。実際、それは今日も作動し、至る方向から税を吸い上げ、資本の流れを歪ませる。投機マネーは、今か今かと暴走のときを待ち、再び差額という資本の傾斜を自在に流れ、膨張する機会を窺っている。いつもその背後にいるのは「魂なき専門人」であり、未来を計算高い予測能力でもって見通そうとする貪欲な人間どもである。

他方、辺りを見回せば、神という支えを失い、際限のない自惚れに身をやつす者たちの姿が目に入る。法を省みず、規範を知らない者どもが阿呆面を下げて、今日も街を往く。見るがいい、鼻が悪いわけでもなく、また酸素を独り占めにしたいわけでもなからうが、いつも口を開けっ放しにし、息を荒らげて歩く連中の顔を。信仰なき人々が、やがて神の目を気にしなくなるのは至極当然の帰結であるとしても、玉座で浮かれ、酔どれ、傲慢なる人間さまの「主体」は、もはや人目など憚らないし、誰の目も全く気にならないかのようなのだ。

近代化のプロセスを整理してみよう。西欧では王権が失墜し、形骸化（形式化Ⅱ立憲君主制への移行）を遂げ、ユークリッド幾何学の牙城が崩れ、そしてニュートン力学の玉座は相対性理論に奪われた。ざっくりばらんに言つて、それは超越性の賞味期限が切れたということであり、法もまた神や王の後ろ楯を失い、それ自身の足で立つことを余儀なくされたということである。

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

今や法と言つても、怒れる神の怒号などではなく、イカれた政治家が慇懃無礼な官僚に作らせた書類の束でしかないし、脱呪術化と言つたところで、さまざまな権威のメッキが立て続けに剥がされ、空き地に落下してゆくプロセスにはかならない。もはや絶対的に卓越したものなど何もなく、何もかもが凡庸なぬかるみの中で脚を取られ、やつとの思いで歩んでいる状態だ。

しかし他方、玉座の主体は、より一層のこと浮かれるのだ。なぜならば、法の権威が失墜するときこそ、おのれの欲望を法と混同し、おのれの欲望に従うことが他者の義務であり、社会の役目だと思ひ込む輩が至るところから虫のように湧いて出てくるからである。近代化とは、卓越したものなど何もないということを示しながら、その同じプロセスの中で、何ら卓越したところのない人に法外な思ひ上がりを許してしまうプロセスでもあったのである。

法の敷居が低くなればなるほど逆に嵩を増してゆくのが人間の自惚れなのである。自分の思ひ通りにならない目障りなものがあるとしてもあれば、それは自分の考えが間違っているのではなく、思い通りにならないものの方がもっと悪いのだと考え、勝手に苛立ち、怒りに震え、キレまくる者たちが次々に現われ、誰彼かまわず当たり散らすのである。

杓子定規に事を進めようとする官僚の傍らには理不尽な要求を突きつけ、半ば余暇となつた時間を潰そうとする老人たちが憤懣をぶちまけ、怒り狂っている。何と言う気味の悪い組み合わせ……と呟いて、冷たく突き放すこともできるであろう。しかし、不快な取り合わせがときとして不思議な結果を産み落とすことがある。

官僚的な接客を旨とする百貨店の店員が慇懃に頭を垂れるその前を見てみれば、系列関係にあるスーパード

買った商品について意味不明なクレームをつけ、延々と真意の分からない怒りをぶちまける白髪の紳士がいる。傍らを通り過ぎただけでも、筋違いなクレームであることは明白である。しかし、百貨店の店員は決して反駁しないし、目に余る愚行だからといってそれを嘲笑し、蹴散らすこともしない。

あるいは老人にしても、自分が場違いなクレームを申し立てていることを重々承知しており、詰問口調でしか人と接することができない不器用さについても自覚しており、しかし他のやり方で人と接する方途を知らず、だから周りから誰もいなくなった寂しさを紛らすべく此処に来て、意味不明なことを延々と言い続けていることを悲しんでいるのかもしれない。

また、店員の側にしても、単に客足が途絶え、時間を持て余しているから仕方なく付き合っているのではなく、さらには厳しく訓練された接客業の心得を頑なに死守しようとしているわけでもなく、むしろ客の不満の身がいったい何なのかを解明しようとしているだけなのかもしれない。そして、老いた客人の定かならぬ閑雅を理解しようと試みるのが、実際には意図せざるセラピーのプロセスを構築していたかもしれないのだ。

「公僕」として職務に忠実であることが官僚教育の要諦であり、官吏は公的な場において他者に対して思い上がることなく、つまり私心なく奉仕することが職業倫理として求められている。同様に百貨店の店員にも私情を交えず他者に接するべき者としての教育が施されている。にもかかわらず、なぜ同じような官僚的な教育が異なる結果を生み落とすのか。官吏は話を聞いた振りをしながら実際には聞かないことに長けているからである。その証拠が例の「たらい回し」というやつだ。しかし、接客業を営む人たちに施される教育は、全くの逆であって、そこでは絶対にたらい回しにしないことこそが心掛けられている。この違いが何に由来するかといえば、それは

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

職業的な環境における自惚れという私情の発露を許す余地の有無に相違ない。「公僕」という純粹無垢に聞こえる職称に誤魔化されてはならない。もちろん我々は、国家への忠誠心に篤いからといって、官僚に自惚れがないなどと考えているわけではない。ただか公務員でしかないのにキャリア組と言つて胸を張るけなげな自惚れでもいいし、地味な事務作業がこの国を支えているのだといういたいけな誇りでもいい。そう、彼らは彼らで自惚れる。この種の思ひ上がりが生まれるのは、計算高いことの私情なき善用が期待される公的職能が、法の威信失墜を契機にして、公的状況において私的に流用されるようになった結果にほかならない。

三 USBは手にしているメモリではなく、その差込み口の規格だよ。

たまに企業の新商品企画会議に出席する機会がある。そこでよく聞かれるのが「顧客のニーズをいち早くつかまなければならない」というスローガンや行動指針のようなものだ。市場に存在する需要を発見し、需要の根底にある消費者の欲望を捉え、それを詳細に分析した上で、人心のどこを突いてゆくか検討し、一刻も早く新商品の市場投入を図りたいのだと言う。

企業とは、自らの図体の維持と成長に見合う規模の利益をあげ得る限りにおいて、商品を生み落しながら資本を回転させてゆく運動体である。企業活動に求められる究極的な目的は何かと問えば、誰もが迷うことなく利益の獲得だと断言するだろう。当たり前のことをさらに詳しく言えば、材料費や労務費といった生産量に連動する直接の変動コストに生産設備や販売網あるいは管理運営組織の維持といった定常的コストを加えた総コスト

が、売上高（販売単価に販売数を乗じた数値）を下回ることにより、利益の獲得は現実のものとなる。その利益の量が命脈を握っているため、企業はコスト・カットと売上高の増大に血道をあげるのだが、新商品の企画が主に担うのは後者にほかならない。

売上高増大といっても、絶対の使命は利益の拡大にあるため、単純に売上高を販売数と販売価格の従属変数と看做すわけにもいかない。前代未聞の新商品を発明して、今まで想像だにし得なかった市場を新規開拓し、販売数と価格の両方が飛躍的に拡大することが夢見られてはいるものの、現実の生々しい会議では、市場は競争の場であるという前提の下で、自社の商品が投入される市場規模が漠然と想定され、そこでの総顧客数が然々の値になると仮初めに想定されている。その一方、販売価格は、同業他社あるいは代替商品を投入し得る異業他社の提供価格との比較において決定されと考えられている。また、商品の販売価格は市場投入時から時間の経過とともに低下してゆく傾向にあるということも相応に理解されている。

そこで定期的な新商品の投入や新業態の展開が図られるのだが、いずれにしても開発というものは二方向に分かれる選択の幅の内側で進められるしかない。選択の幅とは、すなわち「安ければ売れる」という安直なドグマに基づき、低価格商品の投入によってシェアを拡大し、販売数を増大するべきか、あるいは販売数増大もさることながら、「新しければ客は飛びつく」というもう一つのドグマにしたがい、新味を付加することで価格向上を狙うべきかという、二極の軸を有する帯域のことである。

苛烈な競争下で新商品の開発を委ねられ、今後の販売戦略をも担うことになる開発者たちにとってみれば、自社の商品開発能力や他社の動向、あるいは市場の動向を横目に睨みつつも、まずは利益増大に寄与するターゲット

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

として消費者を捉え、彼らの嗜好や関心を見据えなければならない。

人々は口々に「ニーズをいち早くつかまなければ」と言う。たしかに潜在的なニーズ (needs) を把握しなければ、商品開発の方向性が見えず、販売戦略の策定もままならないだろう。だが「ニーズ」はすでに所定の場所にあつて、手を伸ばしさえすれば簡単に把握しうるというものではなく、それもまた計画的に生産されるのである、その生産の主たる担い手は今、欲望の動向という謎めいた問題に頭を抱え、悩ましい表情を崩せないでいる彼ら自身なのである。例えば、アパレルにおける秋冬の流行色は、業界人たちがその年の春先に決議したものである。世界中の業界人が議決された流行色を取り入れることで、予定調和的に秋冬を迎える頃にはその色が流行する（氾濫する）。流行るがゆえにその色は顧客の嗜好と看做され、様々なファッション商品として目の目を見る。そして流行したという紛れもない事実によって、次年の流行色の検討に際して、前年の経験が「ニーズ」として参照される。にもかかわらず、彼らはなお「つかまなければ」と言つては頭を抱えるのだ。自分たちでターゲット像を決議し、産み出したという紛れもない事実が、病的と呼んで差し支えないほど致命的に忘却されているのである。

企業は言う、緻密な調査をし、入手したデータを基にニーズを把握し、さらに詳細な分析を加えた上で新商品を開発する、と。しかし、一連のプロセスは、すでに自分たちが過去に決議したターゲットの行動様式や嗜好に、自らの生産方式や私的な欲望を加算して消費者の意向を再定義することなのである。すなわち、ニーズをつかもうとする行為は、自らの決議の成果を事ある毎に参照することであり、敢えて言えば、飽くことなく蒸し返される自己言及の儀式にはかならない。しかも、その際のニーズにしても、仮想的なターゲットに纏わせたお仕着せ

の衣装に過ぎない。開発者たちは、施し物の衣を纏ったターゲットを通して、かつて商品を開発・販売したときの自らの事情や欲望のあり方を参照しているのである。こうした「自己参照（自己言及）」の成果が幾重にも折り重なりながら上昇的に循環し、やがて生身の消費者は実体を失い、商品の購入というアリバイを通じて、辛うじて認知し得る臃げな客体として開発の場に引っ張り出され、参照されているだけなのである。

世の中にもやもやと漂う量も形も定かでない潜在的な嗜好や欲望、それらをもしも需要と呼ぶなら、そのあやふやな想いに見合うものを商品という形であてがうことや、その商品の普及を目指す諸々の営みをこそマーケティングの本義と言ってもよい。しかし、マーケティングの目的に仕掛けてからが利益の拡大以外にないわけだから、その命題の下で開発者たちは、曖昧模糊とした需要なるものと格闘し、錯綜する諸条件を整理しながら所期の目的を達成しなければならない。

驚くべきと感心すべきか、あるいは「嗚呼！」と嘆くべきなのか俄かにはわからないが、実のところ、素人には予想しがたい結論を前以って導き出すことのできる驚異的な方程式があるのだと言う。大企業の奥まった部屋に通されると、白衣を着た専門職員が小さな書架から一冊の大部な書物を取り出す。なにやらそこには確実に収益の獲得に結びつくマーケティングの計算式なるものが記載されている。専門職員が勿体ぶった口調で「科学的」と呼ぶその計算式は、各項に代入しうる諸条件についても、そのすべてが「科学」的な観点から再定義されているらしい。

マーケティングの計算式では、先ず第一に供給者の項目化が徹底的に押し進められる。すなわち、企業の力的人的、資金的、生産設備的、販路的、企業文化的、情動的、等々に関する自社能力として、あらためて数値化さ

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

れる。無論のこと、世界経済に連動する日々の市場の動向、法や行政といったお上もたらす拘束条件などの外的な諸条件も数値化された上で、どんな式に代入されてゆく。それと同時に消費者の質的な条件、たとえば気分な嗜好や関心、欲望なども「自己参照」的に数値化され、ターゲット像はより純化させられることになる。

この計算式は素晴らしい。なぜかと言って、この式は、今日の運勢が気になる人にとっての星占いに匹敵する信頼性を誇るにちがいないからだ。「赤血球の型がA+の人間は几帳面な性格である」という断定的な命題に劣らず素晴らしい計算式と、そこから引き出された解答(?)は、やはりと言うべきであろうか、大企業の決済システムを通過することが義務付けられている。もちろん、決済の段階においても、企業内の企画、製造、営業等々の各組織において、集合的個人が持ち寄った「欲望」という私的要素が参照され、また加算されてゆく。このような二重の自己参照から算出されるターゲット像は、開発者たちにとって納得しうるだけの輪郭を整え、社内的に同意を得られると確信しうると思しき(本質的には極めて不確定な)私的要素を多分に含んではいるものの、以上のような仰々しくも回りくどいプロセスを誰にもわかるまともな言葉でまとめれば、結局のところ、出てくるのは「B型人間は変わり者である」という甚だ迷惑な真理と同様、従来のイメージと大して代わり映えのしない消費者像なのである。

このような似非科学的な手法は、実のところ、業界内に普遍的なのである。つまり、他社も同様の手法を採って、似たような新製品を投入してくるのが折り込み済みなのだ。だから、市場調査報告書には必ず「他社事例や動向」が添付されている。業界規模に拡大した「自己言及」は、同時に業界ぐるみの「自己模倣」でもあり、各社の愚かしい相互模倣の連鎖にともない、製品の凡庸化と性能の陳腐化をより促進させるという愚かしい仕組み

になり果てている。そのため、市場を席捲できるような真に革新的な商品が開発される場面に遭遇することなど減多なことではお目に掛かれないのである。そして、実際に市場を見てみても、国内外を問わず、似たような商品や業態が過密に犇き合い、さらに過当競争の様相を呈してゆくこととなる。

したがって、開発者たちは、目を皿のようにして市場を流通する商品群を凝視し、そこに微細な差異を見出すことに血眼になるのであり、僅かな狭間に自社の持てる高度技術を投入し、「ガラパゴス化」と呼ばれるような商品を開発してしまうか、ないしは陳腐化戦略の採用によって自社製品や業態の質を毀損してしまうのである。いずれの道を進もうとも、それがまた後の成功例、あるいは若干の修正を加えるべき「ニーズ」として「自己参照」されることになるのだ。生産もまた循環しているのであり、その流れの中で、商品も消費者も次々に個性を失い、ただ利益の効率的獲得の計算項として限りなく純化され、実体を失ってゆく。

具体例を出そう。自己参照の循環をそれ自体として業態の核心に据えた業務形態がコンビニエンス・ストアである。いわゆるコンビニはその名の通り、ある意味ではなかなか便利ではあるが、しかし別の意味ではとても便利とすることができない。たまたまコンビニで気に入った商品をみつけたとしても、数日後には姿を消していることが少なくないのだ。例えば、街の雑貨屋や文具店、食品店などであれば難なく探し出せるようなスタンダードな商品や必需品であっても、コンビニでは商品の回転率が下がれば「ニーズ」なきものとして、合理的経営管理の名の下に行方不明になってしまうのである。

コンビニではPOSによる即時的な自己参照が行なわれ、日々商品ラインナップが更新されている。自己参照の次に来るのは反省に基づく自己改善であるが、自己参照と改善をパッケージにして——もともと改善は自己参

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

照の賜物であり不即不離であるのだが——自動化し、更新の即時化を常態化することに成功した業態こそコンビ二エンス・ストアなのである。

だが誰にとつての改善かといえば、それは決して消費者のためではなく、ただただ商品の高回転によって利益の効率的獲得を目指す企業のためなのだ。口先では新開発とは言ってみるものの、それが改善である以上、革新的な業態の創造などは望むべくもない。せいぜいが「開いてて良かったね」である。業界内の相互模倣により、商品や業態に大差がなく、どのチェーン店に入っても大同小異の状況となり、本当に欲しい物が手に入る機会は著しく減少してゆく。しかし逆説的に言えば、いつの間にか「買いたい物とはこんなもの」と訓育され、消費行動によって個性を際立たせようなどと目論むことのないターゲットには、どの店に入ろうとも同じような商品が手に入り、店舗の選択に悩むことがなくなったのではないだろうか。仮想的に数値化され、すっかり陳腐化された消費者が今度は現実には陳腐化し、企業が産出したターゲットに同化してゆくという倒錯的な現象が起きている。しかし、その点においてもコンビ二は疑いなくコンビ二エントではあるのだ。

私たちはここで少しばかり立ち止まり、ナルシズムの起源について考えておこう。無論、ナルシスト（ナルシスト）の太元に古代ギリシアの神話があるというのは周知の通りである。しかし、ナルキッソス（ナルシス）の死に至る苦悶が那邊にあったのかを考えると、いわゆるナルシストに通ずる何か共通点らしきものを見出すというよりも、些か振じれた屈託のような差異が浮かび上がってくる。

そう、ナルキッソスは水面に映る美しい人に恋をした。なにゆえそうなったかという因果関係は、この際、ど

うでもよい。誰に恋するのかという問題は因果論的に解明しうる問題ではなく、偶発的かつ運命論的な観点から事に当たるしかできない問題だからである。ともあれ、彼はやがて愛しい人が自分だったと悟り、絶望の淵に立つ。しかし、彼は本当に悟ったのか。いや、愛する人が他者ではなかったことが判明し、それを頭で理解し、「あれは自分だったんだ」と納得した後も、ナルキッソスは相変わらず恋慕に苦しみ続けた。その苦悶を通して、彼は水面に映る自分の姿に他性を見出し、苦悶に引き裂かれながら憔悴し、死に至ったのである。水面に手を伸ばし、触れた途端に崩れるその顔が自分のものだということを知ってもなお目を背けられない。触れられぬその顔は、それゆえ他性を帯びたまま、永遠に遠ざかり続ける。ピエール・ルジャンドルは次のように述べていた。「明晰さを取り戻すその刹那には、ナルキッソスもこのイメージが自分のものであることを理解して次のように叫びます。『それ、わたしはそれだ』、と。けれども、狂気が再びかれをとらえてしまう。かれはこの不可能な愛のために死ぬのです。そして死者の国にたどりついてなお、ナルキッソスは地獄の河ステイクスの水面に浮かぶ自分の姿を見つめつづけるのです」。

ナルキッソスの狂おしい悲劇は、幾重にも不可能性が堆積してゆくばかりであるがゆえに悩ましい。ただ苦悶が深まるだけのプロセスでしかないのだから、彼は自惚れるどころか絶望に打ちひしがれるのであり、酔い痴れるどころか極度の苦しみに身を引き裂かれるのであり、陶酔するどころか終わりの訪れぬ覚醒状態に苛まれ続けたのである。彼が悲劇を生きなければならなかったのは、鏡を介した自己愛ゆえではなく、逆に鏡がなく、それゆえ彼岸に見出された他性に愛すべき自己のすべてが奪われたがゆえではなかったのだろうか……。そして、ナルシズムと呼ばれる徴候、もしくはナルシストと呼ばれる人物類型に些かも悲劇の匂いはしないのは、無根拠

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

に肥大した自己ゆえの救い難い喜劇性が滑稽な匂いを辺り一帯に撒き散らしているからではないのか。ナルキッソスは思い上がっていたのではないし、激しい思い込みがあつたわけでもないが、ナルシストは思い上がり、自惚れるのであり、誰にも心当たりのない思い込みにどっぷり浸り、そして理由もわからず、ただ自分自身に酔い痴れているのである。

商品開発者という構造的なナルシストに話を戻そう。彼らは、むしろ悲劇的ではないし、なるほど滑稽ではあるけれども、かと言って単純に喜劇的であると言って済ますこともできない。なぜかと言えば、彼らの喜劇性は、自分に酔い痴れているに過ぎないということをももの見事に忘却している点にあるからだ。彼らは水面に映る「売れたターゲット」がおのれの似姿に過ぎないことをきれいに忘れ、そこに他者性を捉えては酔い痴れ、他者の欲望をつかまえたと思ひ込んで浮かれ騒ぐのである。さらに売れることを夢見ながら、無謀にも水面へ手を伸ばしてみるが、待っているのはいつも悲しくも切なく、また滑稽でもあるお決まりの結末である。抱擁すべきと思われた自己の似姿は、たちまち漣さざなみの向こうに碎け散り、久遠くおんの彼方へ去ってしまうだろう。

しかし、彼らはそのことで悩んだりしないのだ。なぜなら、省察のプロセスが「自己参照」でしかないということを巧妙に掻き消すからくりが組織的に組み立てられ、彼ら全員がそのからくり部品として組み込まれているからである。資本が時差を媒介に増減を繰り返すのと同様、このからくりは時間の隔たりさえあれば、自己を他者化し、自己言及を鏡に映し、おのれと他者とを混同させ、入れ替えてしまうくらい造作もないことなのである。

四 ドイツの港町、ハンブルクではハンバークのことを何と呼んでいるのだろうか？

さて次は、無駄に肥大化した組織が電子化を急ぐあまり、急ごしらえで組み上げたシステムにより、「自分のお金さえ降ろせない銀行」なる珍妙な代物を産み落とす様子を観察することにしよう。因みに以下の議論の土台となった調査技法は、「偶発的参与観察」と呼ばれ、その道の達人にしか実践しえないのはもちろん、ずぶの素人である調査対象にはそれが調査であることすら察知されえない妙技であったことを断っておく。

さて、ある日、支払のため、まとまった現金が必要となり、さる大手銀行へ行ったときの話である。最近は資金移動の電子化が広く行き渡り、いずれの銀行もオンライン化を進めている。そのため、どの銀行でもATM機が設けられた入口ロビー周辺には長蛇の列のすることも少なくない。

だが、その日はいつにも増して多くの人が列に並び、しかも入口近辺には防弾チョッキと編上靴で身を固めた屈強そうな警察官が佇立しているではないか。今日は何か特別な日なのだろうか。そう、この日は年金が受給者へ振り込まれる日だったのだ。「現金による振り込みは一〇万円が限度です。振り込み詐欺には注意しましょう」と大書したプレートも貼り出されていた。犯罪抑止の期待を背負って警察官が派遣され、さらには機器操作に不慣れな高齢者のために配置された行員たちも加わり、狭いロビーは人で溢れ返っていた。

とにかく現金を引き出すべく、高齢者が七割を超える長大な列に並んだ。順番が来て、液晶パネルに指示され

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

た通り、最初に通帳と法人カードを挿入し、次に暗証番号を入力して「お引き出し」にタッチした。

ここまでは順調であった。しかし、その後、金額を打ち込んだところ、「もう一度金額を確かめてください」とエラー表示が出た。なにやら雲行きが怪しくなってきたのはここからである。仕方なく近場に居た高齢者担当の行員に表示を見せ、問題の在り処を尋ねた。

「限度額を超える現金の引き出しですので、ATMでは扱えません。申し訳ありませんが、窓口でお願いします」

「しかしですね、たしか限度額の引き上げを申し込んでおいたはずなんです……。ちなみにATMの限度額っていくらでしたっけ」

「預け入れは、機械の容量から一回の操作では二〇〇枚までとなっております。ですが、同じ操作を繰り返していただければ、無制限になります。振り込みは一五〇万円までですが、ただし、現金による振り込みは一〇万円が限度になっております。現金の引き出しは五〇万円が一日の限度額となっております。法人様で限度額のお引き上げを申し込まれた場合、一日の取り引き限度額は振り込みが一五〇万円、引き出しが一五〇万円です」

ついでに限度額を設けた理由についても尋ねてみた。目の前の行員は「マネー・ロンダリングと詐欺の抑止」という（思わず映画で観たような、たぶん南米はコロンビアに潜伏して、暗黒街を牛耳り、巧みに麻薬カルテルを操るような「ボス」が怪しげな笑みを浮かべ、漆黒のリムジンから白いスーツにサングラス姿で現われる様子を思い浮かべてしまいそうな）目的を挙げると、その考えに些かの疑いさえ差し挟む様子もなく自信たっぷりの笑顔を添えながら「みなさまの預金の安全を確保するためでございます」と付け加えるのを忘れなかった。

もちろん、マネー・ロンダリングがフィクションの産物だなどと言いたいわけではない。しかし、むしろ現実的な問題として目を向けるべきなのは、大半の会社が月末決済をするという紛れもない事実の方ではないだろうか。資金繰りに余裕があるところならいざ知らず、多くの零細企業は月末日の売り上げなどの入金でもって、同じ日の支払いに充当するという資金繰りを組んでいる。例えば、元請A社の支払いがB社の支払い原資であり、それが下請C社やD社の支払い原資になるように、月末同日内における支払い連鎖が形成されている。

新たにできたATMの限度額の規則は、振り込み一五〇万円、現金引き出し一五〇万円、計三〇〇万円で月末支払いを何とかしろというのである。たとえ零細企業であっても、この限度額内では到底月末の資金需要に対応できないだろう。いや零細企業ゆえに振り込みや引き出しが緊急に必要となることが少なくない。それでもとにかく限度額を超えた場合は窓口で処理しろというのである。ところが、銀行の窓口業務は午後三時をもって終了し、無残にもシャッターまで降ろされてしまう。元請けからの支払いが余裕をもって午前中に行なわれていればよいのだが、入金が午後にならずに済んだらすれば俄かに事態が切迫するのは目に見えている。場合によれば下請けへの支払いが不渡りとなり、さらにその先の支払い連鎖も途切れ、小事が忽ち甚大な影響を及ぼしかねない重大事へと変貌し、深刻な時間との戦いに突入してゆく。

こうした事態は中小の零細企業にとどまらず、個人においても同様であろう。例えば、大学の授業料を期限ギリギリになってから振り込もうとしても、金策の結果、やっと手にした現金を携え、銀行に駆けつけたところで一〇万円しか振り込めない。そのとき午後三時を過ぎていれば、授業料未納のため、除籍の対象になってしまうかもしれない。たとえ救済措置があったとしても、その後の手続きで大変な労苦を強いられることになる。たし

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

か、ATM導入における利用者のメリットは迅速な資金の移動にあったはずだ。限度額設定という一方的な契約改変によって、そのメリットを削り落とし、利用者の健全な資金繰りを、「安全」の名の下に保護すると称した余計なお節介によって、却って健全な資金の移動を阻み、円滑な二者関係に割り込んで、邪魔をしているのである——愚かしくも自信たっぷりの笑顔を添えながら——。

清潔な社会の達成というドグマの下、銀行は、自らの唯一の資源である「信用」の維持を旨として、神経質なまでに無謬性を追及し、奇怪なからくりを構築してゆく。彼らにしてみれば、「振り込め詐欺」は、決してあつてはならない犯罪であり、中小企業の日々の資金繰りに途轍もない不自由がもたらされ、挙げ句に黒字の企業が連鎖的に不渡りを出し、倒産の憂き目を見たとしても、そんなことに構っている暇はない。なぜなら、そんな小事よりも問題なのは、犯罪の撲滅という大義名分なのだから。しかし、その大義名分を愚直に言い換えれば、そもそも民間人一般に高額なお金を持たせるのが間違いの元だったのであり、ならば、いっそ持たせないようにすれば解決するという安易な判断の下に採られた措置が、あの仰々しくも不自由きわまりないからくりにはかならないからである——誠実な笑顔さえ添えれば、町工場の倒産などどうにでもなるだろうと思いが——。ともかく、こんな具合にして、日々、いとも簡単に利用者との暗黙契約の条項が一方的に改変され、破滅的な愚行の連鎖にすり替えられてゆくのである。

銀行のお節介で自儘な規則改変にみられる思ひ上がりの問題については、後ほどさらに追及することにしよう。というのも資金移動の電子化がなし遂げたことについて先に考察しなければならぬからである。資金（貨

幣）の電子化とは、硬貨や紙幣を電子的な数値に変換することであり、もう少し厳密に言えば、物質的な裏付けをともなった「お金」を抽象的な記号としての「マネー」に変貌させることである。その目的が何かといえ、いつものことながら効率の向上であり、その成果は資金の移動における迅速化、事務処理コストの軽減、管理機能の向上などによって裏付けられる。しかし、これら電子化のメリットを享受するのは、自分のお金を質に取られ、「電子化」というオンラインの端末に組み込まれた個人ではなく、必ず金融機構や事業体の側なのである。

処理の迅速化とはいうが、それは銀行側における単位時間の短縮であり、ATMの混雑を見れば、窓口の混雑がATM設置場所に移転されたに過ぎず、利用者側の処理の迅速化に寄与していると言うことはできない。

ならば銀行側の時間短縮による事務処理コストの軽減は、はたして利用者に還元されているのだろうか。確かにATMによる振込料は文書によるそれよりも低価になった。しかし、振り込み先と金額により一件当たり一〇五円から六三〇円が手数料として徴収される。それは預金利率が小数点以下二桁の時代において、受け取り利息の一〇倍から一〇〇倍、もしくは一〇〇〇倍を超える金額にのぼる。いくらオンライン・システムの開発費が莫大な額にのぼるとしても、この手数料のようなコストが掛かるはずがない。手数料収入が銀行収益の巨大な部分を占めている事実からも、事務処理コストの低減は、いつの間にか銀行側が独占的に享受する巨額の利益に変貌していることは誰の目にも明白であろう。

管理機能の向上に至っては、利用者に何らメリットをもたらない。せいぜいが金融機関内の事故防止や業績管理に利用されるか、顧客の監視および管理に利用されるのがせいぜいであろう。かつて取り引き銀行の得意先係から次のような不気味な電話が掛ってきて、心穏やかでいらなくなったことがある。

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

「本日、大きな金額が入金されましたが、定期預金にしてはいかがでしょうか。実は、恥ずかしながら今月の預金獲得のノルマがまだ達成できていないので、よろしくお願いできないものでしょうか」

個人や法人の預金状況が覗き見られているのである。誰か一人がそうしているのではなく、組織的に利用者の預金残高をつぶさに観察し、資産状況を把握し、それらを日々の営業活動や融資先の安全性評価に利用しているわけだ。資金移動の電子化は金融機関ばかりでなく、国税においても推進され、決算期には法人所得税の電子申告・納税(e-tax)が声高に推奨されている。その目的は、行政上の事務効率の向上と謳いながら、税務署の任務を考えれば「おまえらの懐具合を探るために決まってるだろ」と暗に言っているようなものだ。ディスプレイを一瞥すれば何もかも一目瞭然という状況を作ることが「効率の向上」によって含意されていることなのであり、それによって便利さを実感し、ほくそ笑むのが誰であるのかは、もはや言うまでもないことだろう。

個人や中小零細企業にとって、金融機関の存在意義は、貯蓄、融資、および決済の利便性にある。貯蓄と融資における利息の格差があまりにも片務的に設定されているとしても、いつ融資を受けねばならぬ事態になるともしれないから、どこかの銀行とは付き合っていかなざるを得ない。また、いくら受け取り利息が僅少であるとはいえ、床下の壺や筆筒の奥に現金を隠匿し、事ある毎に千両箱から手づかみで金子きんすを取り出して毎月の決済をするというわけにもいかない。こうした利用者たちの事情に胡坐をかいて、おのれのための収益蓄積を主眼とした効率追求を図る、そのもつとも手軽な手法が電子化なのである。

もとより資金の移動における電子化は、多様性を孕むアナログ情報を可能な限り排除し、二進法の単純な情報

に還元するという意味において、デジタル化という言葉が含意する事柄そのものである。組織や制度をはじめ、ある種の論理回路を設計するに当たって、何より重要なのは、設計思想や概念の定義における「正しさ」ではなく、いかにして思想や概念から曖昧な部分を取り除き、仮初めの純粹さを仮構しうるかという胡乱さなのである。言い換えるなら、行列に居並ぶ人々を木彫りの棒っ切れと看做すくらいに単純化しなければ、論理回路の設計などという狼藉はできるはずがない。したがって、その論理からすれば、ATMの前に恭しく並ぶ利用者たちは、ネットワークにおける端末操作の一要素でしかなく、オンライン・キャッシング制度の論理的な設計思想の下で、「操作子」として定義された存在でしかない。しかも、その操作子は、長大な列に並ばされても誰もがブチ切れることなく、行儀よくしているように、操作子の素養として所定のマナーから逸脱しないものと（勝手に）決めつけられているのである。

デジタル回路の設計における定義では、銀行の上得意先である羽振りの良い中小企業の社長も、親からの仕送りを引き出すだけの貧乏学生も、はたまた年金の受け取りにしか銀行を使わない高齢者も、すべてが同じ操作子に過ぎない。めでたく民主主義の要諦となる万民の平等は、こうしてもものの見事に達成されたことになるが、同時に多様な個性は霧散し、事業体が勝手に定義したように利用者は（事業者という）羊飼いの指示にしたがう聞き分けのよい仔羊の群れになり下がる。それゆえ、利用者と事業者との垣根を勝手に銀行が越境し、本来は銀行側が担うべき末端業務を利用者に移転してシステムの末端に取り込んでしまうような、自儘な片務的改変が頻繁に行われてしまうのであろう。

最近のことであるが、銀行との質疑応答が相談センターに集中化され、支店担当者と直接話することができなく

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

なった。まずは人工音声ガイダンスにしたがい、電話機のボタンを操作し、自分の相談したい事項について、相手が示した一覧を参照し、所定の区分に当てはめて探索しなければならなくなった。税務署でも同様のシステムを採用し始めたようだ。事業者の側は、どんどん閉鎖系の構築を押し進めたい様子である。ATMや電話相談の集中化が採用されたことで、利用者と事業者との間の境界も質的な変化を蒙っている。一方からの監視性を高め、他方からの不可視性を高める、いわば視線の逆流防止フィルターのような機能を備えつつあるのだ。一方からは出入り自由になっているが、他方からは進入不可能な閉鎖系が生まれつつある。

さて、引き続き、自分のお金を降ろせない銀行の現場へと舞い戻り、近代的な巨大組織がいかに厳格な規則でもって維持されているのかを、具体例を通して体験してみよう。

物語は、ATMでは金額が大きすぎると言われたところまで進んだところだろうか。そのときは、おまけに納税の用事もあったので、言われるがままにカウンターへと赴いた。納税において電子化が着々と進行しているとはいえ、市区町村が管轄する住民税は、徴収者および納税者の多様性から、申告や納税がまだ電子化されておらず、納付の自動振替はあるものの、いまだに紙媒体の申告書と納付書によって税務が処理されている。その制度にしたがえば、給料から天引きした住民税を、従業員の居住市区町村ごとにまとめた納付書を持って、毎月銀行へ出向き、納めなければならない。納入は現金あるいは口座振替のいずれでもよいということになっているが、納付書への收受印が必要となるため、行員と差し向かいで納税処理が行われる。

税金納付には、銀行が指示する「納付依頼書」と「払い戻し伝票」それぞれに全く同一の日付、所在地、口座

番号、社名、職名、氏名、電話番号、金額を書き込まなければならない。当然、時間もかかるし、愚痴も出るというものだ。「……こういう伝票書きの仕事こそ、さっさと電子化で処理させてもらいたいものだなあ」。まあ、不平を呈したところで、利用者に「画期的！」とぬか喜びさせるほど都合なシステムの改変など減多にあるものではないのだから……と諦め、そそくさと伝票を書いて、機械から「べろん」と出ている受付カードを引き抜いて、おとなしく呼び出しを待つことにした。

間もなく番号を呼ばれたので、現金の引き出しと納税を済ますべく、窓口カウンターへ進み、伝票と通帳、そして印鑑を差し出した。ところが、あろうことか「本人確認」を求められるという珍妙な事態に巻き込まれてしまったのだ。

「申し訳ありませんが、ご本人様であることを確認できるものをお持ちでしょうか？」

「はあ？」

「本人確認です。なにか証明できるものをお持ちでしょうか？」

「私は私ですが、なんでそんなものがあるんですか？」

「現金でお引き出しされる金額が限度額以上になっておりますので、引き出される方が口座の持ち主かどうか確認が必要です」

「へっ？ 自分のお金を降ろすだけなのに、私が私であることの証明なんてものが、なんで要るんですか？」

「申し訳ありません。お客さまの大切な預金を犯罪から守るために必要なのです」

「別に守ってもらいたいとは思わないから、確認してもらわなくていいですよ」

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

「いえ、確認しないとダメなんです。規則ですから」

ほうら、来た。有り難いことに、見ず知らずの他人がご親切にも、誰も頼んでいないのに勝手に決めてくれちゃった規則のお出ました。

この世の中で暮らしていて、いったい何が難しいと言って、自分が自分であることを他者に証明することほど難しいことはない。

お節介な理由にしても、降ろす金額が大きすぎるので犯罪を防止するためとのことだった。ならば、少額の犯罪は許容されるという理屈になってしまいが、それでよいのだろうか。犯罪の是非を金額如何で銀行が勝手に決めてしまうというのは、その時点で司法に対する越権になりはしないだろうか。そもそもATMでは限度額をオーバーしていると言われたから窓口までのこのこやってきたのに、いざ引き出そうとしたら、カウンターにも限度額の見えない壁が聳えていたのである。箱根の関所でもあるまいに、預金を降ろすのにいったい幾つの難所を越えなければならないのか……。

どれほど私が銀行員の愚昧さに絶望したのか、読者諸氏にもお分かりいただけたであろうか。私はそのとき、会社名と代表者名が記載された市町村発行の「住民税納付書」を持参し、さらには納付書の記載と一字一句異なるところのない会社代表者名の通帳を持っていた。しかも、その通帳から直接に納税すると同時に現金を引き出そうとしていたのである。拾ったか、あるいは盗んだ通帳と印鑑を使って、先ず始めに頼まれてもいないのに他人の納税をして、それから現金を略取するというような、異常とも言えるほど納税者意識が高く、また善良な泥棒がこの世のどこにいると言うのだろうか。その理不尽なまでに利他的な精神がもしも本物であれば、まさか泥棒

などという所業に手を染めることもあるまい。

思わず、私は独りごちた。「バカか」。

一般に証明には自動車免許証か、パスポートが最も適していると言われる。「ここは警察か？」とか「入国管理事務所か？」と問いたくなるのも止むを得ない。さらに聞けば健康保険証でもOKとのことであった。簡単に言っ
てしまえば、公的機関が発行したものなら何でもよいということらしい。そこで……たまたま鞆の中に入っていた免許証を取り出した。国交省の発行になる顔写真入り小型船舶免許証である。しかし、銀行員の表情は俄かに曇り、次第に奇妙な翳りを帯びてきた。

「内規の証明書一覧に記載されておりませんから、申し訳ありませんが、その証明書ではダメなんです……」

「では、この証明書が贋物だとも言うつもりなんですか」

「いえ、そういうことではなくて……」

「ならば、私が私であることを、この免許が証明していないとでも？」

「いえ、確かにそのようなのですが、私どもの内規には……」

「だって写真が入っていない健康保険証だってOKなんでしょ？　なのに、どうして本人の写真に割り印まで入っている船舶免許がいけないんですか？　厚労省と国交省の省庁間抗争がここまで影響しているんですか。だったら、金融庁に電話して、ここで仲裁してもらったらどうですか？」

理不尽な対応に熱くなり、私の方も言っていることがどんどん大袈裟になり始めた。真面目な行員に難癖をつけ、無理矢理ばやきに付き合わせるような、時間を持て余した厄介者の爺さんと同列に扱われるのもイヤなので、

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

妄想的な愚痴はほどほどにして切り上げた。

しかし、ゆめゆめ忘れてはなるまい。私が現金を降ろそうとした通帳は、法人のものであり、求められた証明書のたぐいは個人のものである。法人の住所と個人の住所は異なっている。厳密に言えば、個人の同一性が証明されたところで、同じ個体が当該通帳から現金を降ろす権限を有する会社の代表者であるか否かは証明できない。公的機関による発行を要件として法人の代表者か否かを証明せよというのなら、内規の一覧に記載された証明書のためにはなく、その日、たまたま持参していた書類、すなわち会社名が記載され、また地方公共団体の発行になる住民税納付書の方が遥かに有効であったろう。しかしながら、そうした文書の有効性の程度を勘案したりする能力や、その場の機転や融通といった個人的な能力を問題にせず、むしろその手の資質や能力を度外視して組織化され、運用されてゆくのが「愚行の流れ」という、システム化された行為の系列なのである。

その日は止むを得ず、本人確認が必要という相手のルールにはしたがうことにしてみた。とはいえ、癪だったので次回のため、さらにもう一つだけ質問を試してみた。

「窓口で本人確認が必要なのは、おいくらからなんですか？」

「お教えできません。規則ですから」

「え、どうしてですか？」

「ですから、規則です」

「それはおかしいでしょう。だって、事前に何か通知があったわけでもないですよね？」

「そのような通知はお出ししていないかもしれません」

「ですから、人の預金を一方的に降ろせないようにしておきながら、それはないだろうと言っているんですよ」
「申し訳ございません。規則ですから」

「いやいや、「規則ですから」の壁は厚い。あまり困惑させるのは本意ではないし、からむのが目的ではないから、条理を尽くして「それがおかしいこと」であることを説いたつもりである。しかし、敵もさる者だ。ただ「申し訳ありません。規則ですから」を繰り返して、粘りに粘ったのである。しばらく揉めたが、限度額を聞き出すことを諦め、本人確認に関しては伝票に個人の住所と氏名を書くことで何とか決着した。

そのうえで、自分のお金さえ降ろせないルールを考え、決めたのは誰なのか問うてみた。

「金融庁？ 銀行協会？」

聞かれた女性窓口行員は困った顔をして、こう言った。

「いいえ、銀行独自で、上の方が決めております。上司を呼びましょうか？」

きつと上司に聞いたところで、また「上の方」と回答されるだけだろうし、銀行窓口でその不条理を責め、追及しても何の解決策をもたらさないことも重々わかっていた。そして、待合ロビーには、いじわるなクレーマーが女子行員を苛めているという奇妙な「空気」が醸成され始めたので、そこで引き下がった。

そう、物事を決めるのはいつも必ず「ウエ」なのだ。決して個人として特定されえない「ウエ」のどこかなのである。上司を呼び出し、そのまた上司を追いかけて、組織の内部を遡行して最上部に到達したとしても、「私と×君とで決めました」という回答が得られることはない。たぶん世間が求めているみたいだから「ウチでも何か

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

やるか」といった、さしたる根拠はないけれども、茫漠とした「空気」だけが行き渡ってゆくなか、危険回避に敏感な嗅覚のみにしたがいい、なんとなく「厳密な物事」が決められてゆく。つまり、責任をもった意思決定という点では、大銀行の上層部でさえも一番の「ウエ」ではない。組織の上方には天井がなく、見上げる視線はただ上空へ抜けてゆくのである。一定規模の人が集まれば、必ずやこのような誰ひとり責任を取らなくても許されるという、まことに「都合のよい」組織が生み出される。役所はその原点にして典型であり、またその結晶でもあるのだ。

自然人に対置して発明されたのが法人と呼ばれる組織である。そのメリットは、個人の生存という観点では、生死を賭けた難事に独力で対処しなくてもよいという一点に尽きる。組織には目的合理性があると言われるが、お金を儲けるとか政策を実行する等々の目的が掲げられているとしても、根底において人間の生存に資することがなければ、それらの目的自体が意味を喪失してしまう。人間本性に準拠し、何のためにその組織が作られ、いかなる営みを維持してゆくべきかという本源的な〈目的―手段〉に照らして、目下のシステムの当否が検討されなければならない。もしも組織最上部の「ウエ」でその本源的な問題が忘却され、見事なまでに思考されず終いだつたとすれば、自儘な諸個人の生存戦略が発露されるのを誰も止められず、間もなく組織の駆動原理である「目的合理性」はどこかしらで破綻し、無残な形骸化のプロセスを辿るばかりになるだろう。そうした形ばかりの組織においては「決定されている」という既成事実のみに依拠して、空疎な形式が意味の空洞を覆い隠しているのが見え見えの哀れな規則遵守が横行することとなるのである。

例えば、日本のサッカーにおいて、久しく何が足りないと言われているだろうか。そう、得点力である。我々

はゴール前で萎縮し、後ろにパスを出すフォワードの選手を見て、「臆病者」と思う——たしかFIFAの会長は「譲り合いの文化（国民性）」という信じ難い理解を示していたが……。しかし、我々の目には遠慮深さなど感じられるはずもなく、ただか責任を取るのを恐れ、身が縮こまっているようにしか見えなかった。具体的な誰かではない「誰か」が、いつかシュートを決めてくれると漠然と期待すること、この期待こそが当の「誰か」から自分を除外する口実になっているのだ。非人称の「誰か」の偉業を期待して「シタ」と「ウエ」は漫然と縦パスや横パスを繰り返す。こんな調子だから、いつまで経っても本来の目的である得点に結びつくシュートを放てないのである。得点できないのは仮想的な偉業の主体としての「誰か」の責任などではなく、その誰かに何もかも委ねてやり過ごそうとする者たちなのである。こうした体たらくにあるチームでは、「目的合理性」が希薄になり、すでに組織を駆動させる原理として働いていない。対照的にパスの質や正確さといった手続の合理性には無駄に神経質になり、互いに厳格なまでに関与し合い、偉業ではなく、どうでもいい些事を追求し合うようになってゆく。

行政も民間もダメな国のナショナル・チームだからダメなのだと言いたいわけではない（言ってるけど……）。この種のダメな組織では、目的の達成を誰の目にも明らかなくらい積極的に妨害しない限り、咎められないのだ。言い換えるなら、目的達成に寄与しなかったという程度では、社会的な生存を脅かされるほどの罰を与えられこともなく、せいぜいが「馬鹿者！」と上司から一喝されることに我慢し、その場をやり過ごせばよい。他方、権限や手続に関する規則に対しては厳格な罰則が設けられ、はっきりと明示されている。こんなふうに考えてみよう。組織内にはすでに目的達成に向けた集団秩序が形成されている。しかし、目的達成への寄与の度合や、分担

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

責任が生じる範囲の設定については、殆どのケースにおいて、個人の選択に委ねられてしまう。人はその場合、他者との支配や支援の関係を結ぶ可能性を視野に入れながら、生存を脅かされない限りにおいて最適な態度を選択し、行為を調整しようとするだろう。個人が集団的な課題に直面し、こうした政治的選択を迫られる状況にあるとき、責任をその一部でも誰かに転嫁できると感じられたなら、多くの人々は馬鹿者や臆病者に徹してでも、何よりも先ず社会的生存を確保する道を探ろうとするであろう。

社会的生死に関わる責任を問われかねない問題について、おのれの誠意や良心に従い、丸裸の一個人として対峙するのは、誰であれ相応に緊張を強いられるであろう。だから、人は集団におのれを^{とうかい}韜晦し、事態に対処しようとする。その種の些か屈託を含んだ力への意志は、しかし組織の組成と駆動に関する原理的な動機でもある。命令された規則を順守することがどれほど鬱陶しいと感じられても、心理的な折り合いをつけ、「シタ」と「ウエ」との間でそれぞれが正確なパスのやり取りを繰り返していれば、少なくとも罰則に対する緊張は回避できる。ゴールを狙っているかのように見せ掛けるだけのパスのやり取りは、なんと気楽で心穏やかなコミュニケーションであろうか。責任者の影らしきものをチラつかせるばかりで、その実、責任者のいない組織にしても同じことである。ああ、組織とは、なんと居心地のよい自然環境であることか。そして、人々は無思慮にも実体のない「ウエ」に身を預け、「茹でカエル」となる。魔女によってカエルに変えられた王子様は、元々の出自と本来の資質とともに忘れ、蓮の葉の上に鎮座したまま、こう呟くのである。「ああ、カエルはいいなあ。もう一生カエルのままでいいかもしれないなあ」。

初期の社会学が証明したように、組織原理が個人の緊張回避を集合的に目指さなくとも、構成員の不作為は、

それが束ねられることによって現場の原理と化し、暗黙のうちに、組織の根源的な目的を蝕み、つまり集団の存在意義さえ毀損し始めるのである。個人がその腐食を抑えようとすれば、間違はなく「出る杭は打たれる」。そして、組織の理念までもが徐々に蝕まれていけば、個人の誠意や良心にしても果てしなく腐敗してゆくしかないだろう。これが組織崩壊と駆動停止の因果論的なもう一方のプロセスである。

こうしたセグメント化された組織の内部がどのように蝕まれるか、その病的な兆候の卓近な例もあげておこう。銀行と同様に人々とのアクセスをカウンター越しに行なう郵便局における出来事である。

ある法定講習会を受講することになった。申し込み要領書には、講習費用は事前に郵便振替で納入し、その証明票を申し込み書に貼付すること、および受講票の返送用封筒を申し込み時に同封することが必須と案内されていた。受講料を納入し、封筒も購入して、その場から申し込み書を指定機関宛に郵送して面倒な雑務を一挙に終わらせるべく、新宿の基幹郵便局へ行った。新たな問題は、同封すべき封筒が「長四型」と指定されていることから生じた。

郵政民営化により、ゆうちょ銀行とかんぽ生命および日本郵便に分社されたものの、業務委託された郵便局にはこの三社が昔ながらに同居している。小さな郵便局では、例えば一つのカウンターの左側が金融関係の「ゆうちょ・かんぽ」で、右側が「郵便」であり、それぞれに二名程度の職員を張り付けている。職員の顔ぶれも変わらず、見た目には民営化以前と何ら変わっていない。

どんなやり取りがなされるだろうか。

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

「郵便振替の送金と、ついでに切手を数枚ほしいのですが」

「すみません、送金はこちらでお受けできますが、切手や葉書の購入は隣の窓口をお願いします」

そう、同じ郵便局であっても対象業務からすれば隣は別会社なのだ。たとえ間に何の仕切りもなく、わずか三〇センチしか離れておらず、切手の入っている抽斗に余裕で手が届くとしても、見えない仕切りが彼らの会社と業務内容を厳密に分け隔てているのである。カウンターの向こう側の執務空間が一体であり、双方の職員が自由に行き来していたとしても、彼らは別会社で働いているのだ。

さて、舞台は大東京の新宿であり、さすがは基幹局と呼ばれるだけのことはある。ゆうちょ銀行は一階のフロアーを使用し、日本郵便は二階という具合に、分社は完全になされていた。受講料の納入を一階で無事に済ませ、二階に上がり、「長四型」封筒を手に入れるべく、概ね二〇名の職員が居並ぶカウンターに歩を進めた。窓口に張り付いた職員の後ろのデスクで、謎めいた数列が印字された書類を見つめているベテランと思しき四〇代後半の女性に尋ねた。

「長四型封筒というものはこちらで売っているのでしょうか。一つ欲しいのですが」

「はい」

「……」

「ええっと、ナガヨンガタでした……か……?」

「はい、長いに数字の四の型というナガヨンガタ封筒です」

「……お待ちください」

にこやかに返答してくれたものの、「もしかするとナガヨンが理解できなかったのか」と嫌な予感が脳裏をよぎった。案の定、ベテラン女史は彼女の机のもう一列後ろの、つまりカウンターからは三列目の机で執務に没頭している、いかにも中間管理職ふうの男性職員のところへ飛んで行った。恐らく数分のあいだ、その男性職員との問答の後、何らかの指示を受けたのであろう、他の二列目職員の机の横の籠をゴソゴソと忙しく掻き回して、やっと封筒の見本らしきものを持って来た。

「これが長四型だそうです。カウンターの左三番目で販売しているとのこと。どうぞこちらへ」

と、カウンター越しに封筒販売職員のところまで誘ってくれた。なかなか親切である。お礼を言い、そのカウンターで順番待ち受付カードを機械から引き出し、封筒・切手販売担当職員の呼び出しを待つことにした。

無事に「長四型」を手に入れたが、それにしても正直なところ、少しばかり驚かされた。郵便局員が定型サイズの封筒を知らないのである。ベテラン女史は、その業務ぶりや接遇態度から見ると、決して昨日や今日、郵便業務に携わったというような素人ではなく、立派に経験を積んだ職員であると断言できる。その彼女が職務上は常識と思われる商品のラインナップを知らなかったのだ。郵便局員における業務遂行能力の退行とでも言うべき穏やかならぬ事態が生じているのかもしれない。

ならば退行が那邊から生じるのかを問わねばなるまい。恐らくはカウンターの向こうに配置された四列のデスクが象徴する職階・職能のタコつぼ的（丸山真男）な職務執行システムに原因を求めることができるだろう。彼らの様子をじっくり観察してみよう。居並ぶ職員はもちろん、後ろに鎮座する「ウエ」においても、おのれが掌握している業務にさえ精通していさえすれば、他の業務についてはたとえ無知同然であったとしても、タコつぼ

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

から一步も出ることなく業務を遂行できる。そうした「ウエはウエ、シタはシタ、ヨコはヨコ」というシステムにそもその原因があるにちがいない。

人の行ないは、環境への適応を目指す主体の自己規定に依存する。対面状況から得られた情報や感情的な刺激などを通じて、人はあるいは行動を起こし、あるいは態度を形成する。特に肯定的な対人接触では、相互触発と自己触発が一体となり、人は自己の範囲を集団へと拡大しながら規定するようになる。例えば、サッカーの歴史で「奇跡」の名で形容されるプレーの数々は、たとえ人々が個々のプレーヤーの名を連呼して偉業を讃えようと、実のところ奇跡的な個人技そのものが肯定的かつ集団的な触発から生み出されたのであり、そのことを忘れてはならない。しかしながら、ポジションやフォーメーションをセグメント化と勘違いしているような官僚的なチームには、そもそも伝説や奇跡の名に値するプレーの創造は期待できそうにない。さらに厳格なセグメント化が隔々まで行き届いた職場環境においては、状況はより悲惨なものとなるだろう。たとえ敷居は見えなくとも、情報の授受は著しく制約され、感情的なやり取りにしても非常に貧しい水準にとどまらざるを得ない。刺激が量的にも質的にも限定され、情緒的な交換の水路が狭くなればなるほど活性は低下し、やがて主体は自らを退縮的に定義するようになるだろう。その結果、個人の認知領域も狭い枠内に限定されるようになり、他の「誰か」がきつと扱うであろう封筒のサイズについてなど誰も気にも留めないし、それで当然と考えるようになってしまうのだ。嗚呼！

五 渡哲也はとろろが大嫌いだが、ソフトクリームは大好きだ。

銀行や郵便局の裁断された組織から生まれる問題状況には、まだ目を瞑っても良いだろう。だが人の生死にかかわる大問題ともなれば、放置して見過ごすわけにもいかない。人類最大の愚行の一つに戦争がある。セグメント化された組織における諸個人の創発的特性により、多くの人々が甚大な災厄を蒙った例を挙げておこう。太平洋戦争における海軍の指導者たちによる意思決定のプロセスである。

戦局が極度に悪化するなか、戦艦大和は沖繩に向かって出撃した。詳細なデータを分析し、撃沈は必至とわかっていながらも、決定に参与した人々は特攻出撃の判断を正しいと判断した。正確に言えば、歴然とした誤りを正しいと誤認することを正しいと判断したのである。そもそもベテランのエリート集団の判断である。言い換えるなら、無知・不見識・情報不足による錯誤などはおよそ考えられない。しかし、その場にいる誰もが例外なく非合理的だとわかっていながら、「そうせざるを得ない」という「空気」に押し流されるがままに最終的な決定が下されたのである。最高責任者である連合艦隊司令長官は、戦後、「私は当時あせざるを得なかったと答える以上弁疏しようとは思わない」と語ったという。そこには、無意識のうちに、自然に醸成される非常に強固で絶対的な支配力をもつ判断の基準としての「空気」があったとも言われている。

戦時中に起きたこの種の意思決定については別の証言もある。一九八〇年から一一年間、海軍の戦争指導の実務の中核を担った軍令部のメンバーが三三一回の「海軍反省会」という秘密の会合を開き、四〇〇時間に渡る録

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

音テープを残した。これがドキュメンタリーとして、開戦、特攻、戦犯裁判と三日に分けてテレビ放映された。⁽³⁾

開戦に至った経緯については、個人としては、戦争は回避すべきと考えていた人物が少なくなかった。しかし彼らは、陸軍との力関係を忖度するあまり、海軍に席を置く組織人として、その場の「空気」に流されたと述べていた。「国の将来よりも、各部署毎でやって、あとは上が決めると思っていた」という証言もあり、まさに「海軍あつて国家なし」、さらに言えば「部局あつて海軍なし」である。

特攻に関しても、「必ず死んでしまう、こんな攻撃はあり得ない」との意見が多数であつたという。しかし、軍令部内で「神」と呼ばれ、特攻を主張する上長の「攻撃とは決死の覚悟でいくが、少なからず生還する方法があるものだ」という発言が、反対し難い「空気」を生み出し、神風や回天などの特攻攻撃が決定された。特攻が上からの命令であつたにもかかわらず、「命令ではなく、崇高な憂国の精神の発露であり、特攻隊員は志願により選ばれ、現場の判断で実行された」という、露骨な論理のすり替えが行なわれていたという合理化証言もあつた。たしかに遊就館に残る若き特攻兵たちの遺書には、自分の意志で特攻に向かう旨の文言が記されているだろう。しかし、その文言に目を凝らしてみれば誰にも簡単に理解できることだが、特攻はやむを得ない選択としての意志であり、個人的な願いや希望として意思されたものではない。それは当時の戦争指導者にも重々わかつていただろうが、それでも特攻は決定され、実行に移された。だからこそ、多くの軍令部員OBは、異口同音に組織の「空気」に対抗する手段もなく、「やましき沈黙」に甘んじざるを得なかったと証言するのである。

開戦か否か、特攻兵器で他者を死地に赴かせるか否か、戦時下、その時々与えられた重大な課題に対し、彼らは彼らなりに全力を尽くして議論したのであろう。しかし、その思考の向かう先は、戦争の惨禍を回避するこ

とや、社会の安寧を維持するといった本来的に彼らが担うことを期待された課題ではなく、上司の卑近な権力欲の発露や、同僚の強引な意見の忖度といったものでしかなかった。すなわち、彼らが関心を抱いていたのは、大域的な意味での戦局ではなく、目下、自らが置かれたローカルな状況における課題の解決でしかなかった。会議室で「グローバル」と連呼して浮かれ騒ぐ官僚たちのローカルな佇まいを思い浮かべるのが適切だろう。閉鎖的環境に身を置き、相応に緊張を強いられる政治的場面に立たされると、多くの聡明な人たちが途端に「馬鹿者」になり下がり、保身を図るべく、ありもしない空気を感じ、勝手にその波に押し流されて行ったのである。

ところが戦争が終了し、おのれの職責の対象が国家や国民の生死という問題から離れ、顔が見える上司を死刑から救う方策へと移った途端、彼らは責任に対してすぐれて自覚的になり、驚嘆すべき有能さを発揮する「優れた専門人」へと変貌したのである。戦後の東京裁判では、戦勝国の一部には元海相・嶋田繁太郎を死刑にすべきという主張があった。しかし、「天皇に累を及ぼさず。中央部に責任がないことを明らかにし、責任追及は現地司令官程度までにとどめる。問題はどこで責任の遡上を食い止めるかだ」という弁護の基本方針に基づき、旧軍令部のメンバーは組織のトップを守るべく綿密な作戦を立て、然るべく行動を開始した。その結果、嶋田元海相は開戦責任では有罪とされたが、捕虜虐待等の戦争責任に関しては証拠不十分で無罪とされ、結審から数年後に釈放されることになった。それは有能な組織人ともぎ取った勝利にほかならなかった。

戦勝国側における戦後統治の方法論的な足並みの乱れや、犯情に対する認識の隔たり、戦争責任を立証する証拠の確度、これら立件と判決に重大な影響を与える諸条件に対して綿密な分析が加えられ、組織人としての責任

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

感を分かち持つ人々による一糸乱れぬ組織的行動により、次々に有効な作戦が案出され、着実に実行されていったのである。犯情判断に不利な情勢が推測された場合には、旧・部下としての証人たちに偽証を強要するなど、ありとあらゆる手を尽くした結果、上司を死刑から救出することに成功した。セグメント内で完結し、公務員の嗅覚に生々しく響いてくる危機的状況や、身につまされる課題等については、彼ら、つまり檻の中で群れをなす犬どもの有能さが遺憾なく発揮されたということになるだろう。

その優秀な彼らが、同じロジックにしたがい、無謀な開戦を決定し、非情な特攻を命令したのである。彼らが出した結論は、あまりにも矮小であり、また愚劣でもあったが、その矮小さや愚劣さの原因は彼らの個人的な資質にあったのではない。恩賜の銀時計や長剣組を含むエリートたちは、たぶん十分すぎるほどに専門的な能力を有する人材であったのだろう。また見識や誠意、あるいは矜持といった軍人として保持すべき個人的な資質も具わっていたであろうし、本義を忘れたわけでもあるまい。だからこそ、彼らは敢えて「やましき沈黙」という言葉を用いたのである。

問題は個人の資質や誠意、そして良心の有無にあるのではなく、人間が集団として緊張を強いられる場面に直面したときに生成される独特の力学にある。つまり、個人的な誠意や良心、矜持といったものが働く部分を鈍麻させ、半ば強制的に視野狭窄へと陥らせる政治的な環境力学としての「空気」にあるのだ。言葉を失わせ、判断を停止させる政治的な「空気」が充満する狭い檻の中で、彼らは「魂なき専門人」へと身を貶めることになったのである。

政治力学における「空気」は、私的な欲望の滲出液が気化する場において生成し、あつという間にその場を占

めてしまうものである。その仕様と組成は漠然として曖昧であるが、「瘴気」とでも呼ぶべき強い毒素が密室を充たし、誰もが無思考に陥り、理に適った判断が何なのかを忘却することになる。もはやそこには、戦争の惨禍に苦しむ国民の姿や若くして逝く人の面影は存在せず、ただ、のっぺらぼうの顔貌しか持たない非人格の、兵器の引き金を引く装置としての、あるいは兵器そのものでもあるような臣民と特攻兵があるだけになってしまうのである。

近代化は「脱呪術化」のプロセスと言うが、はたして二〇歳代の若者を五〇〇人以上も死地に向かわせた旧軍における特攻を、「呪術」に類する概念すべてを抜きにして、どのように捉えたらいいのだろうか。

特攻には、神風や大和魂などと神がかり的な言葉が散りばめられている。はたして精神性への悪しき信仰が狂信的な行動を採らせたのだろうか。明治維新以降の急速な近代化は野蛮な精神性を脱するのに十分な時間を持ち得なかったのだろうか。そうではない。むしろ、それもまた「脱呪術化」の一帰結であり、世界を冷徹かつ合理的に再編成していく傾向から分泌されたものにほかならない。近代的合理性の効率追求の結果として組織の細分化と重層化が生じ、デュルケームが誤って未開社会に見出した環節性（セグメント性）が社会全体に行き渡るようになった。すなわちセグメント化の全域化と精密化の帰結として、近代人は、誰もが適度に従順で有能だが、何ら卓越したところがない凡庸な人物、そう、私や君と同様、適度に有能だが適度に凡庸でもある普通の人物に法外な権力を委ねることになったのだ。このような近代化の成果の一面が、あの狭い檻の中に押し込められ、哀れな判断と惨めな判断停止とで紡がれた無・思考を生み出す「空気」醸成装置となっていたのである。

極度にセグメント化された組織においては、同僚や上司といった実感をともなう具体的な人間関係が優先され

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

る結果、誰も責任を問わず、また問われもしない「空気」が共有される。彼らが「責任」と言い出すときは、みな「ウエ」を見上げるが、その「ウエ」は究極において大気圏外に抜けてゆくのである。「ウエ」のスペックがそういうものである以上、何もかもが「やむを得ない」という共通認識が広く行き渡ってゆく。このような組織・集団における意思決定は、先ず第一に保身の連鎖であって、いつも手段は残るのだが、目的と責任をともなう本義は直ちに、しかも永遠に置き忘れるという運命にある。

役所でも企業でもいまだに変わらないこうした組織における人々の意思決定の在り方は、丸山真男の「タコつぼ」や山本七平の「空気」のように日本特殊論として展開されることが少なくない。

バブル景気の時代、浮かれた意識によって消費されたポストモダンの思想は、なるほど日本人の自惚れに相応しい内容だったかもしれない。しかし、ほどなく景気がどん底を経験した頃だったろうか、ポストモダンなどという時代は存在しないどころか、日本の社会体制は、戦後民主主義によって導かれてきたものですらないと言いつつ人たちが現われた。その人たちの一人であり、代表格だった山ノ内靖は、現今の日本の社会体制が築かれたのは第二次大戦の真つ最中であり、いわゆる総力戦体制こそが今も当時と変わらず、日本の基本的な社会の組み立て（アジャンスマン）なのだ述べた。彼は戦時下の総力戦体制がもたらした社会革命を示唆的にも「強制的均質化」と呼んでいた。名著、『総力戦と現代化』の冒頭に置かれた「方法的序論」において、山ノ内は次のように述べている。「『強制的均質化』は、戦争遂行という非日常的で非合理的な状況によって促されたのであるが、しかし、それだけにとどまったのではない。それは、人的資源の全面的動員に際して不可避な社会革命を担った

という点で合理化を促進した。この『強制的均質化』を通じて、社会のすべてのメンバーは戦争遂行に必要な社会的機能の担い手になること、このことが期待されたのであった。総力戦体制は、社会的紛争や社会的排除（＝近代身分性）の諸モーメントを除去し、社会総体を戦争遂行のための機能性という一点に向けて合理化するものであった⁽⁴⁾。近代的なセグメント社会（環節社会）を可能にする要素は、やはり近代的に構築され、再生産される諸個人の均質性にほかならないのである。

我々は、それゆえ、瑣末とも思える銀行や郵便局の愚かしい話題から唐突に戦争責任の問題に論点を移したのではなく、戦時中のイカれた判断は、極限状況に置かれ、追いつめられた集団がとち狂って出した突飛な決断などではなく、当時も今も不断に作動している社会機械から生み出された愚行にほかならないことを、淡々と例証したに過ぎない。

しかも、総力戦体制と言わずとも、いわゆる総動員体制は、必ずしも日本特殊論に帰結するものでもない。というのも、近代国家の夢は、傭兵による膠着状態や裏切り、権力奪取の危険を脱し、市民が自分たちの社会、すなわち市民社会を守るために銃を持って立ち上がることにあったからだ。しかし、近代化の過程では、その自律的な市民が同時に規律訓練の標的である従順な兵士に変貌させられる事実を忘れてはなるまい。勇敢な主体とは、同時に規律に従い、銃弾の雨あられよりも上官の一喝を恐れ、闇雲に敵陣へと突っ込んでゆく者における思考の麻痺でもあるのだ。

つまるところ、こうした主体の確立を原理として成立した近代国家では、どこであれ、多かれ少なかれ総動員

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな

体制を築き、その上に社会を組み上げてきたのである。

君主制が成立して以来、おのれの安寧のため、「ウエ」を生み出し、見上げるロジックは一般に見られる現象であり、特殊な心理のたぐいではない。確かに、西欧社会では明示的な言葉によつて議論が交わされ、集団的な意思決定がなされると言われる一方、日本では暗黙の了解や、前言語的なやり取りが組織の意思決定を支配すると言われる。しかしながら、意思決定において、その場に身を置く諸個人の集団力学から、まさに内在的な政治情勢が忖度されるということには何ら変わりがないのではないか。

究極において、「ウエ」は神であつても大気圏外の虚空であつてもよい。ともかく絶対的な規範という究極の「ウエ」に身を預けたとき、人が極端な視野狭窄に陥り、個人的な資質や能力への不信を生み出し、それらを不問に付す傾向にあることを理解しておけばよい。人を見下す視線が個人をマニュアル化せねばならぬ木偶にしてしまふのだ。そして同じ視線が空を見上げれば、実体をともなわぬ「ウエ」が、なぜかありありと君臨しているように感じられるのである。その錯覚としての「ウエ」の臨在感が、今度は錯覚としての「安全」を保証し、保身を可能にするという、いわば妄念の循環が日々の行動を支配しているのである。したがって問題となるのは、無論のこと日本特殊論の是非などではない。真の問題とは、愚行を蔓延させ、妄念を循環させる装置が合理的に組織化されるとき、個々の人間の知能や思想のいかに関わらず、其処彼処で必然的に発症する「病的な自惚れ」という近代社会に固有の宿痾なのである。

註

- (1) ビエール・ルジャンドル『西洋が西洋について見ないでいること』、森本庸介訳、以文社、二〇〇四年。一二三頁。
- (2) 山本七平『『空気』の研究』、文春文庫、一九八三年。一五―二三頁。
- (3) 「NHKスペシャル——日本海軍四〇〇時間の証言」、二〇〇九年八月九日、一〇日、一日放映。
- (4) 山ノ内靖・ヴィクター・コシユマン・成田龍一編『総力戦と現代化』、柏書房、一九九五年。一二頁。

嗚呼、度し難きはヒトの自惚れかな